

history of eden

原
罪

と 現在

1

僕はアダム。
ここは、宇宙で唯一の水の星。
小さな、小さな楽園。
小さいけれど、僕達には十分だった。
だって、ここにいるのは、僕と彼女だけ。
他には、誰もいない。
それでも、僕達は幸せだった。

私はイヴ。

私は、彼と共に、この小さな、小さな樂園に生まれた。

私達は、自由だった。

けれど、たった一つだけ、禁じられていることがある。

それは、ある果実を食べること。

美しい色彩をもつ果実。

禁断の果実。

それだけは、何があっても、食べることは許されない。

樂園に住む僕達の頭上には、いつも巨大な、巨大な星があった。

それは、死の星。

水のない、枯れた星。

禁断の果実を食べると、僕達は樂園から、その巨大な、死の星に追放されてしまう。

けれど、僕には不安も不満もなかった。

美味しい果実など、他にいくらでもあるのだから。

美しい色彩の果実。
どんな味がするのだろう。
私は、ひそかに、それが気になっていた。
そしてあるとき、『悪魔』が現れ、私に囁いた。
「少しくらい食べたって、ばれやしないさ」
気が付くと私は、その果実にかじりついていた。

彼女は、僕にそれを見せた。
一口だけかじられた、禁断の果実。

美しい果実。

「なんてことを」

僕は彼女を責めた。

「ごめんなさい、だって、悪魔が私をそそのかしたの」

「悪魔だって？ ここには僕と君しかいないのにかい？」

僕が声を荒げた、その瞬間。

輝いていた太陽が覆われ、世界は暗黒に包まれた。

『神』が現れたのである。

「禁断の果実を食した罪により、お前たちを楽園より追放する」

『神』が私達に語りかけた。

「待ってください。私が果実を食べたのは、悪魔のせいです」

私は、必死で訴えた。

「悪魔など、私の創った楽園には、おらぬ」

その声と同時に、私たちを取り巻く世界に、大変動が起こった。

激しい地震。

そして、この星を覆っていた水が、上空に向かって、高く吹き上がっていく。

私達の身体もまた、ひきずられるように、上空に向かって浮き上がった。

浮き上がっているのではない、落ちているのだ。
僕はそれに気づいた。
頭上にいつもあった、巨大な、巨大な星。
死の星。
枯れた星。
そこに向かって、僕達は落ちているのである。
楽園の水もろとも。
奈落の底へ。

死の星に追放された私は、目を疑った。

上空に見えたのは、小さな、小さな星。

私達の楽園。

水の楽園。

それが、砂漠の星と化していた。

「どうしよう、私のせいで」

私は、泣きながら彼に打ち明けた。

「本当は、悪魔なんていなかったの。だって、楽園には私と

あなたしかいないのだから。悪魔は、私の中にいたのよ」

そう言って泣きじゃくる私を、彼は優しく抱きしめてくれた。

「僕達の罪は、消えることはない。でも、償うことはできる。

ここは楽園じゃない。だけど、生きよう。生きて償おう。

一緒に」

僕たちは、この枯れた大地の星を「地球」と名づけた。
そして、子孫を産んだ。
死の星に、新しい生命が宿った。
楽園から落ちてきた水は、この巨大な星を全て覆うには足
りなかったけれど、
海には海が、
大地には大地が、
生まれ、
育ち、
進化していった。

時は流れ、
僕達は伝説と化し、
僕達の楽園だった、小さな、小さな星は、

『月』と呼ばれ、
今夜もあなたが見上げれば、
『罪深き砂漠』が、そこにある。

(2009年、NASAは月にかつて水が存在したことを確認、
発表した)

END